

【研究論文】

中学校における暴力行為に対する予防教育の必要性 —中学校におけるアンガーマネージメント・プログラムの開発にあたって—

嘉ノ海 仁 士・松 本 剛

学校現場の暴力行為の現状や少年非行の時代的推移、最近の学校の荒れの特徴などを概観し、学校における暴力行為に対する予防教育の必要性を整理した。暴力的な傾向を帯びやすくなったりするなどの中学生の問題行動の背景には、思春期にみられる葛藤から生じる不安が見出せる。「キレる型」非行においては、突発的・衝動的問題の増加、単独での問題行動、非拡散・不連続の傾向、過干渉・過支配型家庭の増加などの傾向が挙げられ、特にどこにでもいる普通の生徒が、突然凶悪な犯罪へと一足飛びに進んでしまう傾向が目立つ。ソーシャルスキルの低下が顕著な昨今にあって、子どもを取り巻く周囲の大人が、これまでの子どもの生活を振り返り、「適切に自己主張すること」や「キレそうになったときに気持ちを静める」ことなどを具体的に教えていく必要がある。これらの議論を中学校におけるアンガーマネージメント・プログラム作成の基盤とする。

はじめに

怒りの感情の抑制ができず、すぐに怒ったり、爆発的な怒り方をしたりするなど、怒りの感情の表現が過剰になっている児童・生徒が目立つようになってきている。一方、嫌なことをされているにも関わらず、自分の怒りの感情を内に抑えこみ、ストレスが蓄積されていく児童・生徒の問題も深刻である。不登校、引きこもり、自傷行為などに代表される、攻撃性が自分に向かっている現象である。これらは、攻撃性が指し示す方向は異なるものの、怒りの感情をうまくコントロールできず、またそれらを適切に表現できないという点においては共通している。

怒りを適切にコントロールする力を育成することは、非行少年に限らず、すべての児童・生徒にも共通する課題である。今後、健全な家庭教育の機能はもとより、学校教育においても怒

りを適切にコントロールする力を育成する必要があると考えられる。

1. 本稿の目的

中学校の問題行動の中でもっとも深刻なものひとつに、心の揺らぎや矛盾を暴力という形で表現する「暴力行為」がある。本論は、学校現場の暴力行為の現状や少年非行の時代的推移、最近の学校の荒れの特徴などを概観し、学校における暴力行為に対する予防教育の必要性を整理するものである。これらの議論を基に、中学校におけるアンガーマネージメント・プログラム作成の基盤としたい。

2. 学校現場の暴力行為の現状

学校現場において児童・生徒間暴力や対教師暴力は、ここ数年、3万件（小・中・高合計）

程度で、若干の増減はあるものの横ばい状態が続いている (Figure 1-1)。児童生徒の暴力行為などの問題行動は非常に憂慮すべき状況であるといえよう。2005年には山口県での爆発物傷害事件、東京都での管理人夫妻殺害事件、福岡県での実兄刺殺事件、さらには、宮城県での警察官刺傷事件など、衝撃的な事件が続けて報道されている。

文部科学省 (2005) は、「新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム (中間まとめ)」の中で、「命を大切にする教育等の充実 (特に社会性を育む教育)」を示し、一連の事件に関わった子どもに共通する特徴として、自分の行為がもたらす影響への思慮の無さ、他者への配慮の欠如、自分の気持ちを的確に表わす表現力が十分に身につけていないことを指摘している。これらは、都市化、少子化の進展等、社会環境や家庭環境の激変の中で「多様な人間関係の中で社会性や対人関係能力を身につける機会が減少している」など全ての子どもが直面している課題でもある。

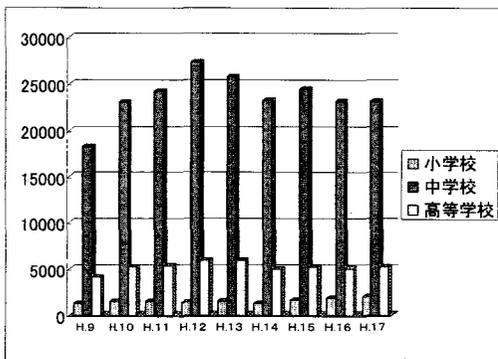


Figure 1-1 学校内における暴力行為発生件数の推移 (文部科学省, 2006)

また、文部科学省 (2006) が発表した「生徒指導上の諸問題の現状についての調査」によると、平成17年度中の暴力行為の発生件数は、公立の小中高等学校で合計34,018件 (学校内30,283件、学校外3,735件) で、昨年度とほぼ

同じであり、依然として看過できない状態にある。加害児童生徒数を見ると、中学生が全体 (小学生から高校生まで) の約三分の二を占めていることがわかる*。

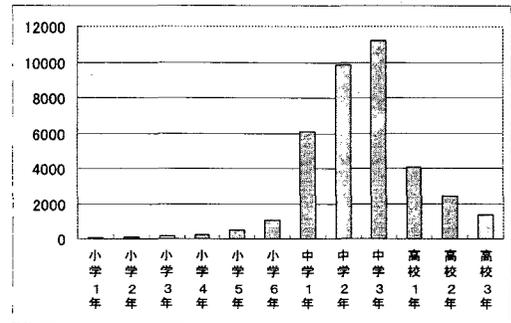


Figure 1-2 平成17年度の学年別加害児童生徒数 (文部科学省, 2006)

3. 中学生の暴力行為の心理的背景

朝倉 (2005) は、中学校段階における問題行動を、「小学校段階までに他律的に創り上げられてきた価値観が成長過程の中で一度崩れ、自分なりの価値観を形成していく過程で起こる問題行動である」と述べている。アイデンティティ形成 (Erikson, 1964) が課題となり始める中学生にとって、思春期特有の心の揺れや、自分らしさを探し始めるための諸行動は必然的に生まれるものであるといえよう。

思春期には、社会通念上好ましいとされるさまざまな大人からの期待に対する反発が生まれやすい。児童期の自分以外の誰かを理想として、その人のようになろうと一生懸命であった時期は過ぎ去り、「自分らしさ」を誰かの物まねではなく、自分自身で (あるいは自分たちの世代の中に) 見つけださねばならなくなるのである。一方では、中学生は周囲から自分がどう見られているかを気にする時期である。奇抜な服装に興味を示したり、自分を強く見せかけようとして暴力的な傾向を帯びやすくなったりするなど

の行動の背景には、思春期にみられるこれらの葛藤から生じる不安が見出せる。

4. 少年非行の時代的推移と最近の「学校の荒れ」の特徴

廣井（2004）は、少年非行の時代的推移を戦後から4期に分けて次のように説明している。

①第1期（S20～S33）「貧困型非行」

戦後の混乱と復興を社会的背景として、貧困や欠損家庭で育つ少年による窃盗などの財産犯が主流であった時期である。

②第2期（S34～S47）「反抗型非行」

国が高度経済成長に向かった時期で、第1次ベビーブーム世代の16,17歳の少年を中心として金と物の価値観のもとで、遊ぶ金銭を得るための窃盗や大学生が権威や権力に反抗したりするなど、既成の価値観に対抗する若者文化が台頭した時期である。

③第3期（S48～H2）「学校型非行」

石油ショックによる経済低成長とその後生じたバブル経済など急激な社会的変動の中で、刹那的な社会風潮を呈した時期である。万引きや自転車・原付車盗など、過剰にあふれた物を盗むことが、遊びと化した「遊び型非行」が、14,15歳の少年を中心に増加し、S58をピークとして、中学生による校内暴力が全国各地で頻発した時期でもある。

④第4期（H3～現在）「現代型非行」

「キレル型非行」

バブル経済が崩壊して以来、完全失業率の増加、学生の就職難など、先が見えない不況に陥り、少子高齢社会の到来など、さまざまな面で従来の価値観の転換を迫られている時期である。学校をめぐるのは、いじめ問題が深刻化し、学級崩壊が小学校でも起こるようになった時期である。

戦後から現在までの少年非行の特徴を概観すると、犯罪や非行はその時代の社会状況を鋭敏に反映したものであることがわかる。

特に、第4期の「現代型非行」、「キレル型非行」においては、「突発的・衝動的問題の増加」、「単独での問題行動」、「非拡散・不連続の傾向」、「過干渉・過支配型家庭の増加」などの傾向が挙げられる。その中で、特にどこにでもいる「ふつう」の生徒が、突然凶悪な犯罪へと一足飛びに進んでしまう傾向が目立つ。

廣井と同様に、清永（1999）は、最近の少年事件を概観し、その特徴を次の5点に整理している。

- ①加害少年が「ふつう」と形容される少年であること
- ②非行化の原因の特定が困難であること
- ③行動が突発的で前兆的行動の認めにくいこと
- ④事件の結果がしばしば決定的で回復不可能であること
- ⑤被害対象が不特定で、時として少年たちの権威対象でさえも被害化すること

また、家庭裁判所調査官研修所は、「重大少年事件の実証的研究」（2001）において、単独で重大事件を起こした少年について次のように分類し、報告している。これらのうち、②と③は第4期の「現代型非行」「キレル型非行」の特徴を端的に表している（廣井，2004、清永，1999）。

- ①幼少期から問題行動を頻発していたタイプ
- ②表面上は問題を感じさせることのなかったタイプ
- ③思春期になって大きな挫折を体験したタイプ

またこれら3タイプの少年の特徴として、次の5項目が共通点としてあげられている。

- (ア) 追い詰められた心理
- (イ) 現実的問題解決能力の乏しさ
- (ウ) 自分の気持ちすら分からない感覚
- (エ) 自己イメージの悪さ
- (オ) 歪んだ男性性へのあこがれ

時代とともに、少年非行には質的な変化がみられ、近年では、突発的な攻撃行動は、非行少年に限らず、一般の少年にも見受けられる。やってはいけない行為と日常的な行為との境界線もあいまいになっており、社会規範を正しく学習していないという印象が強い。学校現場においても、その対応に苦慮し、指導に困難をきたしているのが現状である。

5. 「キレル」の定義とその実態

「キレル」という言葉が生まれて20年程が経つ。それ以前も先に述べたような「暴力行為」や「器物破損」などの問題行動は数多く存在していた。岡本（2002）は、『「キレル」』や『ムカツク』という言葉には、重苦しさ、緊張感、破裂感という響きがあり、何か行き場のないエネルギーが次第に蓄積され、それが爆発し、それまでの秩序が崩壊してしまうような連続性が感じられる」と述べている。

竹内（1996）は、若者たちの「怒りを表すことば」としての「ムカツク」について次のように述べている。

「ムカツクとは、ぐいと呑み込んでコナ（消化）してしまうことも、吐き出してさっぱりしてしまうこともできず、嫌な異物がのどにひっかかった状態のまま耐えている、ということだろう。世界を受け入れることも拒絶することもできないからの自己表現だということになる。荒れることもあるし、自分の肉体を傷つけることもあるが、結局は自分の不安定さへの知覚に閉じこもったままである、表現をしない、行動

もしないからだだ。」

一方驚田（2000）は、「キレル」の語感を以下のように語っている。

「なんか余裕のない言葉だなあとおもう。痛みがどんどんとんがってきているような気がする。痛みの糸を想像力でたどって行って、どうして『キレル』んだろう、じぶんは何に苛立っているんだろうといろいろ思いをはせるその余裕がない。いきなりぷつつん、なのである。そもそもそういうものにかかわっていることじたいがいらいらするのだから、理解してもらいたいのではなく、かかわりたくないのだ。関係を切りたいたいのだ。きっと。」

「ムカツク」は、吐き出すことも消化することもできないまま違和感を持ち続けるだけで、ただだからの異和感を持ち続けている状態であることを示している。一方「キレル」には思いをはせる余裕がなく、いきなり暴力行為や興奮した言動が発せられる様子が見て取れる。

これらの言葉が生まれ、日常的に用いられるようになる前後では、その行動の意味はかなり変容してきたと考えられる。最近の「キレル」行動には、「何とか適応し成長しようと努力してきたが、どうしようもなくなり破綻をきたしてしまった」上での行動であるといった心の葛藤プロセスや柔軟性を見出すことができない。普通の子どもがいても簡単にキレてしまう背景にも、これらのこころの非連続性が共通している。

東京都の報告（1999）では、「キレル」は、「何かのきっかけで、頭の中が真っ白になり、前後の出来事を覚えていない、または通常ではありえない行動に移ってしまう状態」と定義されている。さらに、下坂ら（2000）は、「あることを契機に自己の衝動性を統制できなくなっ

て起こす行動」と定義している。

これらを総合すると、「キレル」という行動は、爆発的な攻撃的行動、通常ではありえない行動、衝動性を統制できなくなって起こす行動であるといえる。本論では「キレル」を、それらの行動を包括して、「衝動的な攻撃行動」と考えたい。

キレル生徒は、自分の内部にある激しい攻撃性や破壊衝動をいかにコントロールするかという問題を抱えている。本来、攻撃性はすべての人の心の中にあり、適応的な方法で発揮されれば、さまざまな創造性や活動性、積極性へと結びついていくものである。この情動を「キレル」という形でしか表出できないところに、生徒たちの抱えるさまざまな問題が潜んでいる。また、キレルことそのものが、彼らの存在確認の手段の一つとなっているという側面もある。しかし、現時点では、そういった生徒たちを理解する理論的枠組みも方法も確立されておらず、関わる親や学校、地域、専門家などすべての人々がその対応に苦慮し、見通しを持ってないというのが現状である。

尾木(2000)は、「キレル子現象」に関する専門家会議(東京都, 1999)で発表された養護教諭の聞き取り調査を、次のように分析している。「子どもたちがあげたキレル理由は、教師に対してよりも友人への気遣いや友だちが自分勝手であったり、自分がバカにされたりするなど、怒って当然という場面である。つまり、キレル理由は合理的でもっともなものである。」また、子どもたちがムカついたり、イラついたとき、どのような行動をとるのかについて、同調査は、①「攻撃する」、②「不安から自己防衛としての感情を閉鎖する」、③「うまくセルフ・コントロールする」の3つのパターンを報告している。しかし、①「攻撃する」といった攻撃性をストレートに出す行動パターンは、45%にも上がっているのに対して、③「うまくセルフ・

コントロールする」と答えた子どもは、

0.5%にすぎない。また、②「不安から自己防衛としての感情を閉鎖する」は表面的には穏やかであるが、イラつきやムカつきを心の中に抑え込んでいる。いつでも何らかのきっかけや刺激や状況によっては、①「攻撃する」といったパターンに移行する準備的、予備的な状態である。

さらに、尾木(2000)は、「このように、キレルきっかけとなる原因や理由そのものは、それほど不合理なものは見られないが、その感情をうまくコントロールしたり、問題解決ができないために攻撃的で短絡的なかたちで暴力が噴出しているのである」と述べている。

これらのことから、「キレル」という行動には、自分の感情を上手くコントロールできない背景にあり、そのための適切な方法を獲得することが必要だと考えられるものであるといえよう。

6. 対人関係能力の低下と予防教育の必要性

非行に走る子どもの中には、ソーシャルスキルを獲得できていない場合が目立つ(Figure 1-3)。特に、一般の中学生(一般群)と警察に補導された中学生(非行群)を比較してみると、「非行の誘いを断る」「謝罪する」「被害を届ける」「衝動をコントロールする」といったスキルについては、一般群に比べて非行群の子どもが獲得している割合が低い。

また、中高生などのグループによる傷害事件を検証してみると、事件を起こす際、まずキレやすい子どもがカッとなり「キレて」暴力を振るいだし、そこに主張スキルの育っていない周囲に流されやすい少年が追随していく傾向が見られ、歯止めのない暴力へ発展してしまうという問題点が指摘されている(石橋, 2004)。

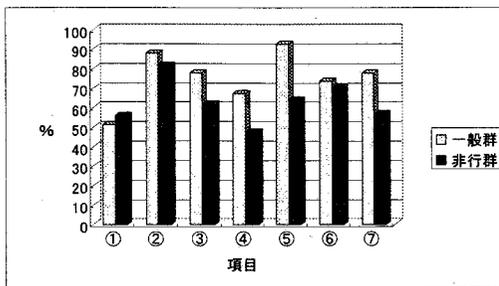


Figure 1-3 中学生のソーシャルスキルの獲得状況
(石橋, 2004)

- ①不満を主張する ②和解する ③謝罪する
④衝動をコントロールする ⑤非行を断る ⑥感情の伝達 ⑦被害を届ける

今、子どもの心身の発達に重要な役割を果たしてきた「遊び」のスタイルが大きく変化してきている。子どもは、人との交流を通じて、相手の言葉の理解やその態度や仕草をまねたり、相手の表情や目線など言葉以外の部分を読み取ったりしながら、対人関係などを円滑に処理していくソーシャルスキルを学んできた。

ところが昨今では、少子化の影響や生活スタイルの変化から、年齢の異なる子どもとの遊びを体験する機会が減少し、そのために上下関係を学習する機会が欠ける傾向がみられる。また、テレビゲームやパソコンなどの普及によって同年齢同士であっても一緒に遊ぶ人数は減少している。顔を合わせて遊ぶ機会が減ったことにより、子ども同士が情緒交流したり、これまで日常生活の中で育まれてきたソーシャルスキルを自然に学ぶ体験を積んだりする場が不足する事態を招いている。

ソーシャルスキルの低下は、非行少年に限らず、広く小学生から高校生まで一般の児童・生徒に共通している。子どもを取り巻く周囲の大人が、これまでの子どもの生活を振り返り、「適切に自己主張する」ことや「キレそうになったときに気持ちを静める」ことなどを具体的に教

えていくことが必要だと思われる。

学校現場においては、暴力行為などの問題行動が一度発生すれば、その対応は困難を極め、校内の二次的な問題（いじめ、不登校…）につながることも少なくない。これらに対応するための具体的なアクションが今、学校現場で求められている。

7. 結論 — アンガーマネージメント・プログラムの必要性

中学生に対する、規範意識の低下、耐性の不足、他者への思いやりの不足、対人関係能力の未発達、コミュニケーション能力の欠如といった指摘がされるようになって久しい。本論で述べたように、中学校現場では、生徒間暴力や対教師暴力などに関するさまざまな問題を抱えており、もはや学校が安全な場所でなくなりつつある。そのために、問題行動を起こす生徒への個別対応も重要であるが、それにとどまらず、予防という視点で何らかの手だてをとることが求められている。中学生の「怒りの原因」や「怒りへの対処方法」の実態を明らかにし、それを基にしたアンガーマネージメント・プログラムの作成・実施が望まれる。

アンガーマネージメントでは、怒りの感情をなくしてしまうと考えるのではなく、その怒りと上手く付き合っていくことが大切である。アンガーマネージメント・プログラムを開発し、それを実際に学校現場で実施してその効果検証を行い、それをもとにしてより適切なプログラムを開発していくことが今求められている。

※ ここでいう学校における「暴力行為」とは、「自校の児童生徒が起こした暴力行為」を指すものであり、それはさらに「対教師暴力」「生徒間暴力」「対人暴力」「器物破損」の4つに分類される。

引用文献・参考文献

- 朝倉一隆 2005 「発達段階に応じた問題行動への対応」安部英行(編)『月刊生徒指導 2005年3月号』学事出版 p.86
- Erikson, E. H., 1964, *Insight and Responsibility*. W. W. Norton & Company, Inc. ;NewYork.
- 廣井亮一 2004『司法臨床入門 家裁調査官のアプローチ』日本評論社 pp.166-169, pp.179-180
- 本田恵子 2005『キレやすい子の理解と対応 学校でのアンガーマネジメント・プログラム』ほんの森出版
- 石橋昭良 2006「キレない子を育てる家庭-非行防止の視点から」真仁田昭、他(編)『児童心理 2006年9月号 怒りをコントロールできない子』金子書房 pp.103-104
- 石橋昭良 2004「少年と携帯電話に関する調査」犯罪心理学研究 第42巻特別号 pp.34-35
- 河野莊子 2002 「キレのメカニズム」宮下一博、大野久(編)『キレる青少年の心』北大路書房 p.42-43
- 家庭裁判所調査官研修所 2001『重大少年事件の実証的研究』(財)司法協会
- 清永賢二 1999「現代少年非行の世界-空洞の世代の誕生」清永賢二(編)『少年非行の世界』有斐閣 pp.1-35
- 宮下一博 2002「キレの定義」宮下一博、大野久(編)『キレる青少年の心』北大路書房 p.3
- 文部科学省 2005「新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム(中間まとめ)」
- 文部科学省 2006「生徒指導上の諸問題の現状についての調査」
- 尾木直樹 2000『子どもの危機をどう見るか』岩波書店 pp.159-163
- 岡本吉生 2002「関係が傷つきを癒す」村松励(編)『暴力をふるう子 そのメッセージの理解と指導技法』学事出版 p.35
- 岡本祐子 2002「キレることの意味」宮下一博、大野久(編)『キレる青少年の心』北大路書房 p.65
- 岡山県教育センター 2003『中学校におけるアンガーマネジメントの試み』
- 下坂剛・他 2000『現代青年の「キレる」ということに関する心理学的研究1-キレ行動尺度作成およびSCTによる記述の分析-』神戸大学発達科学部紀要, 7(2), pp.1-8
- 竹内敏晴, 1996, 「からだとことば」(『岩波講座/現代社会学4:身体と間身体の社会学』), 岩波書店, p.102
- 東京都 1999『キレる-親、教師、研究者、そして子どもたちの報告』東京都(編)ブレン出版 pp.3-45
- 鷺田清一, 2000, 『ことばの顔』, 中央公論新社, p.100